

オンライン上での協調学習が学習の動機づけに与える効果

京都外国語大学
巻下 由紀子

1 はじめに

京都外国語大学では、対面授業をより能動的に行うために反転学習型アクティブ・ラーニングの導入を進めているが、その手法の一つとしてソーシャル・メディアを利用した授業外での協調学習を行っている。本報告では、京都外国語短期大学キャリア英語科1年次生対象の選択科目「英語圏文学の理解」の授業での取り組みが、学習の「動機づけ」に及ぼす影響について調査した結果を紹介する。

授業では19世紀末の英文学作品を教材として用い、学生自身の気づきを通じて作品理解に不可欠な背景知識を得ることを中心に学習を進めた。授業外では個人での予習のほか、3週間にわたり受講生15名を4グループに分け、学内のシステムを用いて内容の解釈や疑問点などを話し合う協調学習を行った。

本研究では「動機づけ」の指標に岡田・中谷(2006)¹が作成したものをを用い、グループメンバーとの関係が学習の動機と関連する「取り入れ的」動機づけと、より主体的な学習への取り組みを示す「内発的」動機づけに着目し、活動のログや半構造化インタビュー調査などから質的に検討を行った。

2 インタビューの結果

了承が得られた学生5名に対し、事後に約20分の個別の半構造化インタビュー調査を行った。対象学生のシステム上での発言文字数は、同じグループで3週間活動した学生CとDはそれぞれ2445文字と1743文字、別グループで2週間活動したAとEは各約780文字、1週間のみ活動したBは170文字であった。

インタビュー調査の結果、「取り入れ的」動機づけがグループ活動参加のきっかけとなるが、活動を通じ、より自律度の高い「内発的」動機づけが喚起された学生もいたことが明らかになった。

活動参加に「取り入れ的」動機づけが関係していることは、「事前学習があるので、もう絶対にやらないといけないので」(学生A)や、「討論を進めないと次の授業に臨めないから」(学生C)、「(他の学生の発言から)しないとあかんわ、ってなって」(学生E)のような発言から伺える。また、「(活動に参加していないメンバーに対し)僕の活動している姿を見せたいな、っていうのは結構ありました」(学生A)のように、他のメンバーの存在を意識していたケースも見られた。

また、活動がより自律度の高い「内発的」動機づけを喚起していると考えられる発言も見られた。学生Dは課題としての文書作成には苦手意識を持っていたようであるが、活動については「楽しかったし、自分の身になるっていうか。(中略)自分の国語力というか、そういう文の解釈の力とかも高まるのと、そこで英語の表現とかいろいろ出てくるのもあるんで」と述べており、学習内容への理解や興味の高まりから自分の成長を実感していたようである。また、学生Aは「途中から(教材である文学作品の)先が気になって、全部読んでしまった」や「直接(将来の仕事などには)関係なくても、人と話す時の語彙力とかもここから学べるし、(中略)自分の持っている許容範囲とかがどんどん広がるんじゃないかな」のようにコメントしており、「取り入れ的」が「内発的」動機づけに変化していったことが伺える。ほかにも、学生Cの「他の人の意見を聞くのが楽しいんですよ」のような発言から、オンライン上での活動自体が「内発的」動機づけの喚起につながった学生もいたと考えられる。

3. まとめと課題

インタビュー調査から、オンライン上での協調学習では「取り入れ的」動機づけが活動参加のきっかけとなるが、活動を通じ、より自律度の高い「内発的」動機づけを持つことができる学生もおり、その場合、学習内容への興味喚起と、グループ活動への興味喚起の二つのケースがある可能性が示唆された。これらのことから、オンライン上での協調学習は学生間の相互作用を通じ、学習への動機づけを高めることができ、それによって長期的な教育効果を生み出す可能性があると考えられる。

(注1) 岡田涼、中谷素之(2006)『動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響』教育心理学研究 54(1)、pp.1-11